

# 顔延之論語説考

高橋 均

## まえがき

本稿は、皇侃の論語義疏に引かれる宋・顔延之の論語説を検討するものである。記述は、「一」「二」「三」に分かれ、「一」は書誌的事項の検討、「二」は論語説の検討、「三」は資料である。「三 資料」は、論語義疏に見える顔延之の論語説遺文を輯佚したもので、章ごとに整理し、整理番号を付してある。論語義疏は、清熙園本論語義疏（天理図書館蔵）を底本とし、敦煌本論語疏（略称敦煌本）、根本遜志校訂本（略称根本本）および玉函山房輯佚書所収「論語顔氏説」（略称馬本）と対校し、その校語を記してある。

—

顔延之（晋・孝武帝太元九年 AD 三八四—宋・孝武帝孝建三年 AD 四五六）の伝は、宋書卷七三に見える。それによれば、字は延年、瑯琊臨沂の人、官は光祿大夫にまで至った。孝建三年に亡くなり、散騎常侍、特進を追贈され、金紫光祿大夫はそのままであった。宋書の伝に「好讀書、無所不覽、文章之美、冠絕當時」「延之與陳郡謝靈運俱以詞彩齊名、自潘岳、陸機之後、文士莫及也、江左稱顔謝焉。所著並傳於世」と記されるように、文学者として名高い人物である。ただ伝のなかに、論語に注を施したこと、さらに論語にかかわることなどについて一切言及はなく、また書目にも、顔延之の論語注に関する記事の記載はない。

しかし皇侃の論語義疏中には、「顔延之」あるいは「顔特進」として合わせて一五条の論語説が引かれている<sup>[1]</sup>。これによって、顔延之に論語説があったことが知られるのである。前述したように、顔延之の伝、あるいは書目にこの論語説にかかわる記事は見えないから、顔延之の論語説がどれほどの条数で構成されていたのか、その論語説に名称があったのか、なぜこの一五条が論語義疏に引かれて残っているのかなど、いずれも明らかにする方法がない。以下、残された一五条にもとづいて、顔延之の論語説にかかわるいくつかの問題、この論語説にこめられた顔延之の意図、論語説の性格、それ以前の論語解釈と比

[1]

較しての特色、さらに論語説中に、「文章之美、冠絶當時」と称された顔延之の文章家としての力量が、どのように反映されているのか、こうした点について順次検討を行なう。

注

- (1) 「三 資料」の整理番号で、(5)は論語義疏一章中に三条、(7)(12)(15)は一章中に、それぞれ二条の顔延之の論語説が分けて引かれている。これをそれぞれ一条として数えていくと、合わせて二十条となる。ここで一五条という数え方は、一章に引かれるものを合わせて一条として数えた場合である。

二

### 1) 論語説引文に用いられる「顔延之」と「顔特進」

顔延之の論語説でまず検討を要する問題は、論語義疏が疏中に顔延之の論語説を引く際に、「顔延之曰～～」として引く場合と、「顔特進曰～～」として引く場合と、異なる名称が用いられていることである。すでにふれたように、「延之」は字で、「特進」は追贈された官位である。論語義疏が、同一人の論語説を引くのになぜこのように異なった名称を用いるのか、そこに何か意味、あるいは意図があるのかということをもまず考えてみる。

「顔延之曰～～」として説を引くのは、「三 資料」の整理番号で(1)より(8)、そして(10)(11)の一〇条で、「顔特進曰～～」として引くのが、残る(9)および(12)(13)(14)(15)の五条である。このようにすべてで一五条と少ない資料であるが、そこから分かることは、資料の前半、すなわち為政篇から子路篇までに引くのが「顔延之」、その後を「顔特進」として引いているように見えることである。しかし同じ先進篇の中でも、資料(8)は「顔延之」として引き、資料(9)は「顔特進」として引いていて、同一篇内でなぜこのような違いがあるのか、その理由がよくわからない。あるいは論語説は長文のもの、比較的短文のものとさまざまであるから、文の長短がかかわるのかも考えられるが、そうであると断定できるほどははっきりしているわけではない。また論語説の内容を見てみても、「顔延之」「顔特進」によって違いがあるようには見えない。

以上から、顔延之の論語説を論語義疏に引いた人は、たまたま子路篇くらいまでは「顔延之曰～～」として引き、その後を「顔特進曰～～」としたということまではいえるようであるが、それ以外に何か明らかな理由を見出すことは

できない<sup>(1)</sup>。しかしこれもわずか一五条より見た結論であることをことわっておく。そこで、本稿の「三 資料」では、論語説の冒頭に(顔延之)(顔特進)のように論語義疏に記される名称を残して後の検討に備える。ただし「顔延之」「顔特進」の説を本稿に引く際、とくに両者を区別する必要がない場合には、「顔延之」を用い、また資料引用では省略する。

## 2) 論語説はどのような意図で作られたか、その性格の検討

次の問題に移る。顔延之の論語説は、多くの場合一章中に一条引かれるのが例であるが、資料(5)、(7)、(12)、(15)については、同一章の中に、二条あるいは三条に分かれて説が引かれている。ここからどのようなことが分かるか、考えてみる。

資料(12)は、同一章に顔延之の説が二条に分かれて引かれていて、次のようである。(論語の経文と区別するために、顔延之の論語説は経文より一字下げて記し、文頭に\*を付してある。)

子路問成人。曰若臧武仲之知、……曰、今之成人者何必然。見利思義、

\*見利思義、雖不及公綽之不欲、猶顧義也<sup>(A)</sup>。

見危授命、……(憲問篇)

\*見危授命、雖不及卞莊子之勇、猶顧義不苟免也<sup>(B)</sup>。

この章のテーマは「成人」「今之成人」である。そして、ここに引かれた顔延之の論語説は、いずれも「今之成人」を問題とする経文に繋がれたものである。「今之成人」について、経文が「見利思義」とするのに対して、顔延之は(A)のように説く。(A)の説は、直前の経文「公綽之不欲」を引いてきて、公綽のような「不欲」には及ばないものの、「利」に出会っても「義」を重視することである、といている。つまり「見利思義」という経文から「利」と「義」との関係を明らかにしようとしているのである。(B)は、経文「見危授命」という句にかかわって立てた説である。ここでも直前の経文「卞莊子之勇」を引いてきて、卞莊子の「勇」には及ばないが、「顧義不苟免」という句で結んでいることは、「義」のために死を避けることはない、という主張なのであろう。すると顔延之は、「見危授命」という経文についても、前の「義」という基準をここに適用して、この句には直接示されていない「義」と、この句の「命」との関係としてとらえていることが分かる。こうしてみると、顔延之の説(A)(B)は、「見利思義」「見危授命」という経文をそれぞれに解き明かそうとしたもののように見えるのであるが、しかし顔延之が(A)(B)そ

れぞれに「顧義」（義から判断する）という同じ表現を用いていることは、この（A）（B）二条は、それぞれの経文にかかわって別々に存在するものではなくて、「義」を判断の基準として「利」と「命」との関係を明らかにしようとしたものである、と見るのできるのである。そして顔延之は、それが、この章のテーマ、すなわち章旨であると考えているのであろう。ここから、顔延之の論語説（A）（B）は、形式的にはそれぞれ経文について注解として説を立てているように見えるが、明らかにしようとしていることは、この章の章旨である「今之成人」にかかわる「義」を判断の基準とした、「利」と「命」とのそれぞれの関係であるとわかる。このように見てくると、顔延之のこの二条の説は、それが繋がれている句についての注解として作られたものではなくて、この章の章旨として元来はまとまった形で記述されていたもので、それを論語義疏の編者がここに引いた時に、それぞれ経文「見利思義」「見危授命」下に分けて繋がれたものではないかと推測するのである。

同様のことは、一章の中に三条の論語説が引かれている資料（5）でもいえるようである。

曾子有疾、孟敬子問之。曾子言曰、鳥之將死、其鳴也哀、人之將死、其言也善。君子所貴乎道者三、動容貌、斯遠暴慢矣、

\*動容則人敬其儀、故暴慢息也<sup>(A)</sup>。

正顔色、斯近信矣、

\*正色則人達其誠、故信者立也<sup>(B)</sup>。

出辭氣、斯遠鄙倍矣。（泰伯篇）

\*出辭則人樂其文、故鄙倍絶也<sup>(C)</sup>。

この章では、それぞれ経文の下に、分けて（A）（B）（C）三条の説が引かれている。その三条を見てみると、まったく同じ字数で、同じ文型で作られていて、あたかもそれぞれの経文に繋がれた注釈のように見える。しかし、その文中には、経文の「動容貌」「正顔色」「出辭氣」に対応して、それぞれ「人敬其儀」「人達其誠」「人樂其文<sup>(2)</sup>」という句が補われて、説は構成されている。そしてこの補われた句中に見える「儀」「誠」「文」という三語が、それぞれの句のキーワードと考えられる。顔延之は、この「儀」「誠」「文」三語をこの章でいう「所貴乎道者三」の「三」とみたのであろう。この説は、形だけから見るとそれぞれの句が繋がれた経文だけを解説したもののように見えるが、そうではなくて、実は「儀」「誠」「文」という三語が不可分の関係で関わりあってこの章の章旨となっているのである。そうであれば、顔延之の論語説としては、

(A) (B) (C) 三条が、それぞれの経文にかかわる別々の注解として作られたとは考えにくく、この三条が合わさって、この章の章旨としての論を構成していたと考えられるのである。そしてそれを後になって、論語義疏の編者が義疏の中に取り入れた際に、それぞれの経文下に分けて繋げたものとみられるのである。

資料 (15) についても同様のことがいえないだろうか。

孔子曰、見善如不及、見不善如探湯。吾見其人矣、吾聞其語矣。

(集解) 孔安國曰、探湯、喻去惡疾也。

\* 好善如所慕、惡惡如所畏、合義之情、可傳之理、既見其人、又聞其語也<sup>(A)</sup>。

隱居以求其志、行義以達其道。吾聞其語矣、未見其人也。(季氏篇)

\* 隱居所以求志於世表、行義所以達道於古人、無立之高、難能之行、徒聞其語、未見其人也<sup>(B)</sup>。

(A) (B) と分かれて、それぞれの経文に繋がれている二条の論語説であるが、章の前半部と後半部とをまとめて述べていて、元来は (A) (B) が合わさって一つの論を構成していたもので、ある経文だけを別々に限定して注釈として解しているのではないことは明らかである。

顔延之の論語説を見てゆくと、論旨の進めかたにひとつの特徴が見えてくる。ここで、その点について考えてみよう。顔延之の論語説は、先に挙げた例でもそうであるが、まずかかわる論語の経文の一句を引き、それに補足する形で文を補なって論を展開させている。そのためにある経だけにかかわる注解のように見えるのであるが、そこには必ず、注解とは性格を異にする、経に関連して想起される彼の所論が補われて記されているのである。この (A) についても、経文の意を取った「好善如所慕、惡惡如所畏」という句があり、それに「合義之情、可傳之理」という二句が補われ、最後にまた経にそった「既見其人、又聞其語也」を引いてくる。(B) では、経文の意を取った「隱居以求志於世表、行義所以達道於古人」に、「無立之高、難能之行」という二句が補われて、最後に経にそった「徒聞其語、未見其人也」を引いてきて、その論語説を構成している。そうすると、(A) (B) で補われている「合義之情、可傳之理」「無立之高、難能之行」こそ、顔延之がこの章でいたかったこと、この章の章旨であろう。(A) (B) 二条が、このように同じ形式でもって構成され、さらに内容上も関連を持っていることから推量して、(A) (B) 二条は、もともと一文としてまとまってこの章についての顔延之の所論として記述されていたもの

で、別々に単行して記述されていたのではなからう。それを論語義疏の編者が後に義疏の中に取り入れたとき、分けてそれぞれ関連する経文下に繋いだものであろうと推測する。

それに対して、一章に一条の説が引かれる場合はどうであろうか。資料(2)を見てみよう。

子曰、君子無所爭。必也射乎。(八佾篇)

\*射許有爭、故可以觀無爭也。

「射には争うことが許される。それゆえ、他のことでは争うことはない」というこの説は、表現としては経文のこの一句を解釈したもののように見える。しかしこの章の章旨として顔延之は、射の儀式の一つ一つを明らかにすることにあるのではなくて、「君子に争うことはない」という原理を明らかにすることである、と考えているのではなからうか。義疏には、射においては何ゆえ争うことが有りうるのかということについて、晋代の李充、欒肇、無名の説者の長文の疏が引かれ、射の儀礼が詳細に記されている。それに対して顔延之のこの説は原理を述べるのである。それはまさに江瀚<sup>(3)</sup>がいう「不惑於晉人之雜説」というようであり、彼の論語説の特長を示すものといえることができるであろう。

次に、資料(14)について検討しよう。

子曰、智及之、仁不能守之、雖得之、必失之。知及之、仁能守之、不莊以莅之、則民不敬。知及之、仁能守之、莊以莅之、動之不以禮、未善也。

(集解) 王肅曰、動必以禮、然後善也。(衛靈公篇)

\*智以通其變<sup>(A)</sup>、仁以安其性<sup>(B)</sup>、莊以安其下<sup>(C)</sup>、禮以安其情<sup>(D)</sup>。化民之善、必備此四者也、必有大成量也。

見てわかるように、この説も五字ずつ字数をそろえ、所論を簡明に叙述している。そしてその説の第一句(A)「智以通其變」は、経文の「智及之」の文意を説き明かしたものであり、第二句(B)「仁以安其性」は経文の「仁不能守之、雖得之、必失之」の文意を解き明かしたものであり、第三句(C)「莊以安其下」は経文の「不莊以莅之、則民不敬」の文意を解き明かしたものであり、第四句(D)「禮以安其情」は経文の「動之不以禮、未善也」を解き明かしたものと見られる。しかも経文の論旨が「智」「仁」「莊」「禮」を連関させながら、それぞれが前を承げる形で展開しているのに対して、顔延之の説では「智」「仁」「莊」「禮」を「化民之善」の必須の四項目として単立させて述べていて、経文の構成とは異なっていることは、この経文に借りて、顔延之はあた

かも自説を述べることに関心を向けているようである。こう見てくると、彼の論語説は、それぞれの経文について注解を目的として立てた説というよりも、論語についての顔延之の読書記録であり、章全体にかかわるその章旨を明らかにする目的で立てられた説である、と見たほうがわかりやすいのである。

このことは、資料(14)で顔延之の論語説が繋がれているのが集解下で、経文下ではないことも、こう考える有力な傍証となる。これまでも他の論語説家の検討の際に指摘したように、章末の集解下に繋がれている疏は、多くの場合、章全体にかかわる疏であることが多いからである。論語義疏の編者は、疏を経文下に繋げる場合、章全体にかかわる疏は、それを章末に繋げることを通例とする。そして、もし章の最後に集解が置かれている場合、その集解の後に繋げるので、形式上集解下に繋がれることになる。この結果、章末の集解下には、二つの性格の異なる疏が併記されている可能性がある。このように見てくると、資料(14)が集解下に繋がれていることは、論語義疏の編者もまた、この顔延之の論語説を、ある経文に限定される注解的な説ではなくて、章全体に関わる説であると見ていたからであろうと推測できるのである。

以上から、顔延之の論語説は、論語義疏のある一章に二条あるいは三条に分かれて引かれている場合もあれば、一章に一条のみ引かれている場合もある。二条、あるいは三条に分かれているものも、もともとはまとまった一文であったと考えられる。そして、二条、あるいは三条に分かれているのは、論語義疏の編者が義疏に取り込んだときに、これを分けてそれぞれの経文下に繋げたものであろう。顔延之が論語説に記しているのは、その章にかかわる章旨で、論語を読んだ際の読書記録ともいえるものである。そのためであろう、顔延之の論語説には、経についての語釈的な説はほとんど見えない。一五条の中に、訓詁的な注がまったく見えないこともそのことを裏付けるのである。

また集解との関連でいえば、顔延之の説は、すべて経文にかかわる説で、集解についての言及はない。たとえ集解下に繋がれていても、それは章全体にかかわる説であるため集解下におかれている、ということなのである。

### 3) 論語説の特長

顔延之の論語説は、それまでの論語解釈と比べてどのような特長があるのだろうか。

まず資料(1)を見てみよう。為政篇「色難」の説明である。

子夏問孝。子曰、色難。

\*夫氣色和、則情志通。善養親之志者、必先和其色、故曰難也。

顔延之以前の「色難」の「色」についての解釈は、集解に見える「馬曰、承順父母顔色」というように、仕えるべき父母の顔色を指し、それに副うことの難しさを述べたものとする。この点は、集解をうける義疏もまた同様の説を述べる。一方、顔延之はここに引いたように、「色」を「氣色」と説明する。「氣色」とは、人間の「表情・感情」などの外面に表れるものを指すことばであろう。そして「情志通」の「情志」とは、「意思・精神」などの内面に存するもの、と考えられるから、「氣色和則情志通」とは、顔延之が、人間の「表情・感情」がどのようなであれば「意思・精神」が相手に伝わるのか、その筋道について考えを立てようとしていると読める。顔延之の考えでは、人間の「表情・感情」が「和（おだやか）な状態であって、はじめてその人の「意思・精神」が相手に「通じる」というのである。そして経文の「色難」とは、人間の「表情・感情」を「和（おだやか）にすることの難しさをいったものである、と解する<sup>(4)</sup>。以上をまとめれば、顔延之は、「色難」という語句を分析して、人間の「表情・感情」と「意思・精神」との関係に踏みこんで、その両者の円滑なつながりの難しさを指摘したもので、この点に従来の説との違いを見ることができるのである。

また資料（9）は次のようである。

柴也愚、參也魯、師也僻、由也喭。子曰、回也其庶乎、屢空。（先進篇）

\*空非回所體、故庶而數得。

この章の「空」の理解については従来二説に分かれる。一つは、集解にもとづく「空匱」、また集解をうけた疏の「窮匱」とする説で、貧窮のたとえである。ちなみに、王弼の説「庶幾慕聖、忽忘財業、而數空匱也」もこれに従うものである。もうひとつの説は、集解の別解「一曰、空猶虛中也」に拠った「虚」とする説、その集解の別解をうけた疏にいう「一通云、空猶虚也、言聖人體寂而心恒虚無累」とするものである。そして顔延之の「空」の理解も、義疏の編者は「虚」としていて、集解の別解に連なる解釈となる。ただ集解は、「空」を「虚中」としながらも、「空」であることを願うのは顔回自身ではなく、顔回が「柴」「參」「師」「由」等の弟子たちに「虚中」であれと願う、顔回自身は、「心」を「虚」にしなければ「道」を知ることはできないことを知っていた、と解している。それに対して、ここに示した顔延之の説は、顔回自身が「空」を体得していないことから「空」を願い、しばしば体得したと解する。顔延之の「空」についての解釈は、集解の別解に従いながら、それとはまた異なる説



となっている。

また資料(10)に見える論語説は次のようである。

子張問明。……浸潤之譖、膚受之愬、不行焉、可謂遠也已矣。(顔淵篇)

\*譖潤不行、雖由於明、明見之深、乃出於躰遠。躰遠不對於情僞、故功歸於明見。斥言其功、故曰明、極言其本、故曰遠也。

この章では、「明」と「遠」が問題となる。子張がたずねた「明」に対して、孔子は「明」と「遠」とを挙げて答えとする。この章に付けられた集解に見える馬融の説は、「無此二者、非但爲明、其德行高遠、人莫能及之也」というから、「浸潤の譖」、「膚受の愬」の二者がないならば、それは「明」であるばかりか「遠」であるといって差し支えない。「明」とは、明察する力、「遠」とは、徳行が高遠で、人が及びがたいことというから、「遠」を人の及びがたい優れた洞察力とみるのであろう。しかし集解は、両者の差をこのように述べても、とりたてて「明」と「遠」との関係を明らかにしようとするわけではない。それに対して顔延之の説は、「明」と「遠」とをどのように関連付けるかということに重点をおいているようである。「浸潤の譖」、「膚受の愬」が行なわれないのは、「明」によるといい、その「明」について、「明見之深、乃出於躰遠」というから、目に見える現象の深層に「遠」の存在を見ているのであろう。しかしその「遠」は、現象によってしか目に見えてこない。説の末尾に「斥言其功、故曰明、極言其本、故曰遠」(その功を指していえば明といい、その本を突き詰めていえば遠である)という。「功」という目に見える現象を察知できる能力を「明」とし、その現象の深層としての「本」、すなわち根本を察知できる能力を「遠」と解しているのである。この顔延之の解釈は、資料(1)の「色難」で示された、人間を「氣色」と「情志」との関係でとらえる理解に通じるであろう。顔延之は人間の内面の分析に強い関心を持っていて、それを論語のこの章を借りて行なっているともいえるのである。

以上「色難」「空」「明・遠」三例を挙げて、顔延之の論語説が、それ以前の解釈の中心であった集解と、それに沿った義疏に見える解釈とかかわっていないことを明らかにした。これは顔延之の論語説が、前節でも言及したように、取り上げるある章について、その章を借りて自分の関心事を分析し、深めるといった性格を持っていて、結果としてその章の章旨を明らかにすることに重点が置かれるからであろう。そのため、論語全体にわたって語句を解明し解釈するということには関心が向かず、集解ともかかわらない論語説になっているのではなかろうか。そうであれば、顔延之の論語説は、論語のそれほど多くの章

に施されたものではないのかもしれない。顔延之の論語説が従来とは異なる新たな説であることを認めると同時に、彼の視点の違いに注目する必要があるだろう。

#### 4) 論語説の表現

ここで顔延之の論語説の表現について見てみよう。まず指摘できることは、その論語説が平易でかつ簡明、行文も整い、さらに多くの場合、対偶を重視した文構成になっていることである。

そうした点を、資料(3)でみてみよう。

子曰、以約失之者、鮮矣。(里仁篇)

\*兼小居薄、衆之所與、執多處豊、物之所去也。

この章について集解は、「俱不得中也、奢則驕溢招禍、儉約則無憂患也」と解する。すなわち「約」に対比させて「奢」を挙げ、その理由を、どちらか一方だけでは「俱不得中也」(いずれも「偏って」中を得られない)からであるという。一方、顔延之は、経文の「約」を「兼小居薄」(小を手にし、薄に居る)と解し、そうであれば「衆之所與」(衆人が支持する)といい、その文に対比させて「執多處豊、物之所去」(多を手にし、豊に居る、衆物が離れる)をおいて、四字ずつ二句の対偶的表現でその説を構成する。経文の「約」という語を起点として、「小・薄」と「多・豊」という両極の並存する状態が二句ずつの対偶表現をもちいることで明示され、その結果として、集解のように、「約」と「奢」という単純な対比ではなく、さらに「俱不得中也」という補足的説明句も必要なくなっているのである。こうした論旨を述べる際に、四字ずつ四句の対偶表現による文章構成は、効果を発揮しているといえるのである。

同じように平易で整った文として、資料(5)をあげる。

君子所貴乎道者三、動容貌、斯遠暴慢矣、

\*動容則人敬其儀、故暴慢息也。

正顔色、斯近信矣、

\*正色則人達其誠、故信者立也。

出辭氣、斯遠鄙倍矣。(泰伯篇)

\*出辭則人樂其文、故鄙倍絶也。

この章について集解は、「動容貌、能濟濟踰踰、則人不敢暴慢之也」「正顔色、能衿莊嚴栗、則人不敢欺誕之也」「出辭氣、能順而説、則無惡戾之言入於耳也」というように、経文「動容貌」「正顔色」「出辭氣」について、それぞれ

「能濟濟蹢蹢」「能衿莊嚴栗」「能順而說」という説明的な句を補って文を構成し、こうした説明的な句を補うことで、経文の理解をはかっているのである。それに対して顔延之は、「動容貌」「正顔色」「出辭氣」という経文については説明を加えず、それによって生ずる結果を「儀」「誠」「文」という三語にこめて<sup>(6)</sup>、それぞれ「人敬其儀」「人遠其誠」「人樂其文」という句を補って示している。顔延之は、同じように句を補いながら、集解のようにたんなる説明的な補足で理解を図るのではなくて、「儀」「誠」「文」の三語を合わせて、この章の章旨であることを提示している点が異なるのである。また顔延之の行文を見ればわかるように、三句はまったく同じ文構造で構成され、字数もそろえ、表現も平易で、きわめて整えられた文となっている。こうしてみると、この章に限らず、顔延之の論語説は、対偶表現を用いていること、字数をそろえていること、文がきわめて整えられていることが大きな特徴といえる。

このように整った文構成をなしている点では、資料(15)もそうである。

孔子曰、見善如不及、見不善如探湯。吾見其人矣、吾聞其語矣。

(集解) 孔安國曰、探湯、喻去惡疾也。

\*好善如所慕、惡惡如所畏、合義之情、可傳之理、既見其人、又聞其語也<sup>(7)</sup>。

隱居以求其志、行義以達其道。吾聞其語矣、未見其人也。(季氏篇)

\*隱居所以求志於世表、行義所以達道於古人、無立之高、難能之行、徒聞其語、未見其人也<sup>(8)</sup>。

(A) (B) とともに結語の部分だけは、経文をほぼそのまま使っているが、その他については、言葉を補いながら平易に改めている。その説(A)は、五字・四字・四字と二句ずつ対偶表現を用いて文が構成されている。(B)もまた九字・四字・四字と、これもまた二句ずつ対偶表現を用いて文が構成されている。このように、顔延之の説は、対偶表現を用いるために対比的に論を立てることが多い。これまでも繰り返したように、その構成は字数をそろえ、平易な表現を用い、整えられた表現となっている。こうした点に顔延之の論語説の文章上の特色を見て取ることができる。

以上、資料(3)(5)(15)について、顔延之の論語説の特色である、平易な表現と、字数をそろえた対偶表現による文章構成、さらには対比的な立論という点を、資料に沿って見てきた。顔延之にとっては、論語説という事柄を明らかにすることを目的とした文であっても、詩品(中)「宋光祿大夫顔延之詩」で「體裁綺密、情喻淵深、動無虛散、一句一字、皆致意焉」と評される文

章意識が機能しているといえるのである。

(注)

- (1) 江瀚もまたこの点について、「或云顔延之、或云顔特進、便文稱説、無義例也」というから、その義例を見出しえなかったのであろう。  
江瀚の説は「増修四庫全書総目提要・経部・四書類」「論語顔氏説一卷」にみえる。
- (2) この「文」字を、馬本は「義」字に作る。しかしこの句は、経文の「出辭氣」によるはずであるから、「義」とするのは誤りで、「文」が正しいであろう。
- (3) 江瀚の説は(1)と同じ。
- (4) この文は、敦煌本では異文があり、「必先和其顔色故曰色難」とする。これによれば、「氣色」と「顔色」とが同じように使われていることになる。
- (5) この点については、すでに「(2) 論語説はどのような意図で作られたか、その性格の検討」で言及した。

### 三 資料<sup>(1)</sup>

- (1) 子夏問孝。子曰、色難。(為政)  
(顔延之) 夫氣色和、則情志通。善養親<sup>(2)</sup>之志者、必先和其<sup>(3)</sup>色、故曰難也<sup>(4)</sup>。(皇侃義疏)
- (2) 子曰、君子無所爭。必也射乎。(八佾)  
(顔延之) 射許有爭、故可以觀無爭也。(皇侃義疏)
- (3) 子曰、以約失之者、鮮矣。(里仁)  
(顔延之) 秉小居薄、衆之所與、執多處豊、物之所去也。(皇侃義疏)
- (4) 子張問曰、令尹子文、三仕爲令尹、無喜色也、……子曰、清矣。(公冶長)  
(顔延之) 每適又違、潔身者也。(皇侃義疏)
- (5) 曾子有疾、孟敬子問之。曾子言曰、鳥之將死、其鳴也哀、人之將死、其言也善。君子所貴乎道者三、動容貌、斯遠暴慢矣、  
(顔延之) 動容則人敬其儀、故暴慢息也。  
正顔色、斯近信矣、

- (顏延之) 正色則人違其誠、故信者立也。
- 出辭氣、斯遠鄙倍矣。(泰伯)
- (顏延之) 出辭則人樂其文<sup>(5)</sup>、故鄙倍絕也。(皇侃義疏)
- (6) 子絕四。(子罕)
- (顏延之) 謂絕人四者也。(皇侃義疏)
- (7) 子曰、衣弊襤袍、與衣狐貉者立、而不恥者、其由也與。(集解) 孔安國曰、襤、棄著者也。
- (顏延之) 狐貉襤袍、誠不足以榮<sup>(6)</sup>耻。然自非勇於見義者、或以心戰不能素泰也。
- 不忤不求、何用不臧。子路終身誦之。子曰、是道也、何足以臧。(子罕)
- (顏延之) 懼其伐善也。(皇侃義疏)
- (8) 子曰、孝哉閔子騫、人不間於父母昆弟之言。(先進)
- (顏延之) 言之無間、謂盡美也。(皇侃義疏)
- (9) 柴也愚、參也魯、師也僻、由也喭。子曰、回也其庶乎、屢空。(先進)
- (顏特進) 空非回所體、故庶而數得。(皇侃義疏)
- (10) 子張問明。……浸潤之譖、膚受之愬、不行焉、可謂遠也已矣。(顏淵)
- (顏延之) 譖潤<sup>(7)</sup>不行、雖由於明、明見之深、乃出於躡遠。躡遠不對於情僞、故功歸於明見。斥言其功、故曰明、極言其本、故曰遠也。(皇侃義疏)
- (11) 子曰、如有王者、必世而後仁。(子路)
- (顏延之) 革命之王、必漸化物以善道、染亂之民、未能從道爲化。不得無威刑之用、則仁施未全。改物之道、必須易世、使正化德教。不行暴亂、則刑罰可措、仁功可成。(皇侃義疏)
- (12) 子路問成人。曰若臧武仲之知、……曰、今之成人者何必然。見利思義、(顏特進) 見利思義、雖不及公綽之不欲、猶顧義也。
- 見危授命、……(憲問)
- (顏特進) 見危授命、雖不及卞莊子之勇、猶顧義不苟免也。(皇侃義疏)
- (13) 子曰、不逆詐、不億不信、抑亦先覺者、是賢乎。(集解) 孔安國曰、先覺人情者、是寧能爲賢乎、或時反怨人也。(憲問)
- (顏特進) 能無此者、雖未窮明理、而<sup>(8)</sup>亦先覺之次也。(皇侃義疏)
- (14) 子曰、智及之、仁不能守之、雖得之、必失之。知及之、仁能守之、不

莊以莅之、則民不敬。知及之、仁能守之、莊以莅之、動之不以禮、未善也。(集解) 王肅曰、動必以禮、然後善也。(衛靈公)

(顏特進) 智以通其變、仁以安其性、莊以安其下<sup>(9)</sup>、禮以安其情。化民之善、必備此四者也、必有大成量也<sup>(10)</sup>。(皇侃義疏、邢昺正義)

(15) 孔子曰、見善如不及、見不善如探湯。吾見其人矣、吾聞其語矣。

(集解) 孔安國曰、探湯、喻去惡疾也。

(顏特進) 好善如所慕、惡惡如所畏、合義之情、可傳之理、既見其人、又聞其語也。

隱居以求其志、行義以達其道。吾聞其語矣、未見其人也。(季氏)

(顏特進) 隱居以求志於世表、行義所以達道於古人、無立之高、難能之行、徒聞其語、未見其人也。(皇侃義疏)

## 注

- (1) 顏延之の論語説は、經文より一字下げて記してある。また論語義疏の元の形を残したため、經文が分かれて記され、それぞれの下に論語説が繋がれている場合がある。
- (2) 敦煌本は、親字が無い。敦煌本が顏延之の説を引くのは、この一条のみである。
- (3) 敦煌本は、其字下に顔字がある。
- (4) 敦煌本は、難也二字を色難二字に作る。
- (5) 馬本は、文字を義字に作る。經文の「出辭氣」との対応で考えると、義字に作るのは誤りであろう。
- (6) 根本本、馬本は、榮字を策字に作る。根本本、馬本の誤りであろう。
- (7) 馬本は、潤字を愬字に作る。馬本が文意をもって改めたのであろう。
- (8) 根本本、馬本は、而字の下に抑字がある。
- (9) 邢昺正義所引、根本本、馬本は、下字を慢字に作る。旧抄本各本は下字である、根本氏が邢昺正義所引によって改めたのであろうか。
- (10) 邢昺正義所引、根本本、馬本は、必有大成量也六字が無い。旧抄本各本(足利本を含む)には、この六字があるので、根本氏が校訂の際に削除したのかもしれない。文明本に「已下六字イ无」の校記があるので、旧抄本中にこの六字がないテキストがあるのであろうか。

(大妻女子大学短期大学部)